慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	〔報告二〕 日吉台地下壕保存の会の活動
Sub Title	Purpose and activities of the association for preservation of the Hiyoshidai bunkers
Author	新井, 揆博(Arai, Michihiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.55(153)- 65(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム : キャンパスのなかの戦争遺跡 : 研究・教育資源としての日吉台地下壕
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔報告二〕日吉台地下壕保存の会の活動

新井　揆博

はじめに

今日は、表題にありますように日吉台地下壕保存の会の活動について、今まで取り組んできた私たちの活動、もう二二年になるのですが、その一端を皆さんにご紹介し、今まで主として取り組んできたいわゆる見学会の実施・その他、語り部としての役割、そしてこれからの活動のあり方などについてご報告させていただきます。

保存の会の結成まで

私たちの会が結成されたのは、一九八九年の四月八日です。それまでは、組織的な取り組みや活動はできていませんでした。また、個々人としては、ここに地下壕があるよ、あの戦争中に海軍が総力を挙げて造ったものらしいものがあるよ、ということで、いろいろと勉強していた。こういうことはあったと思われるのですが、実際に組織的な研究、活動というものはなされていなかった。

でも、そうしたなかでも、いくつかの重要な足跡がありました。早い時期のものとして、慶應義塾高校の生徒さんたちが、初めは興味から入っていくのですが、かなりしっかりした研究を行っています。その研究の成果が文化祭（塾高祭）で報告され、その後、冊子にまとめられていくというものでした（地底研究会編一九七二『わが足の下　日吉地下施設の秘密』）。ですから、大人はその生徒さんたちから学んで深めていった。こう言っていいと思うのですが、この生徒さんたちの取り組みで、感心するところは、あらためてこの本を拝見すると、自分たちの足で地下壕を測量し、そのうえで、戦時中軍隊は、

なぜああいう地下壕まで造ったのだろうというようなことを当時の関係者にインタビューしてまとめているんですね。当時軍令部の第一部長であった富岡定俊海軍少将（一八九七～一九七〇）ですが、その方にお会いしたり、それから海軍三〇一〇設営隊（海軍省所属〔施本担当地区に派遣、昭和一九・八・一五編成、昭和二〇・八・二二解隊、現実には九・二五解隊、任務は日吉海軍総隊司令部・連合艦隊司令部特防備施設設営〕）、の隊長であった伊東三郎さんという方にもお会いして、うかがった内容をまとめ上げていくというような、基礎的、科学的な取り組みがなされている。読ませていただいて、あぁすごいな、と感じ入っているしだいです。

さて、その後、慶應義塾大学の教員、職員の方が、この地下壕に入って、構造的にも非常に優れたものであるということも含めて、これを保存し、もっともっと研究を深め、何故これを造り、ここで何が行われたのか、こうした点を追求する活動を行っていこうと考え始めたわけです。それが保存の会としての組織になったのが、一九八九年の四月八日ということです。この日は、遅ればせながら、慶應義塾、そしてまた、地域の市民を含めた人たちが、これから地下壕を保存し活用していこうじゃないかという取り組みを、組織的に始めた日であったわけです。

この会は、当初、「連合艦隊日吉台地下壕保存を進める会」という名称でした。現在は日吉台地下壕保存の会という名称で進めております。日吉にあるのは、単に連合艦隊司令部地下壕だけではないからです。そこには、海軍省人事局地下壕、軍令部第三部待避壕、航空本部等地下壕、それから駅の西側に設営された艦政本部地下壕などが含まれます。

つまり、一時日吉は海軍の街になってしまったわけです。これはもう大変なことですね。日吉は空襲でかなり被害を受けていますが、日吉にお住まいだった人は、軍隊がここにいたから空襲を受けたんだ、というようなこともおっしゃっています。日吉はそういう歴史のある街だということです。

そういうなか、いったいこの戦争は何だったのか、また、日吉にこのように海軍の中枢部が集まった理由はなんだったのか、というようなことを掘り下げて、これを市民に伝えていかなければならない。子ども、孫、末代までにも、かつてこういう戦争があったんだよ、ということを伝えていかなければならない、ということで、保

存の会が立ち上がったということです。

保存の会の目的

当初、会の目的は、次の四つでした。一つは、日吉台地下壕を平和記念の史跡として保存するための運動をしようじゃないか。要するに史跡として位置付けるということですね。これはどういうことかといいますと、私たちが考えているのは国による史跡、国指定史跡です。慶應義塾が地下壕を保存しますよといっても、失われるということがないとは言えません。やはり国が文化財としての価値を認めて指定すること、これがやっぱり大事なんですね。というようなこともありまして、国史跡に指定されるように運動していこうじゃないかと考えたということです。二番目は、やはりそういっても、ただ単に保存を目指すというだけではなく、なぜ地下壕を保存しなきゃならないのか、どんな価値を持っているのか、ということを、勉強、調査、研究しようということです。三番目は、やはり、私たち保存の会だけではなくて、塾の関係者を始め周りにお住まいの住民、市民はもちろん、より多くの方々に、地下壕の価値を理解していただくというような活動を行っていこうということです。地下壕を末永く伝えていくというようなことをやる場合には、当然自ら調査し、研究したことを、市民に永く伝えていく、語り部として伝えていくというようなことが必要なんじゃないかということになります。最後の四番目は、この戦争と平和の問題を考え、学習できる平和資料館を作るというようなことです。当初からこういうようなしっかりした内容を掲げながら取り組んできたわけです。

戦争が終わってもう六五年ですね。現在、あの戦争を体験した方たちが、だんだんだん少なくなっていくということが問題になっています。そういう中で、「人からモノへ」ということが言われ続けていますが、モノというと、考古学的な調査や研究がより重要になってきて、それに依拠していく必要があります。これはもう必然的なことなんですね。地下壕は、戦争の実相を研究し、伝えることのできる貴重な存在であって、歴史研究の資料であることはもちろん、歴史教育、生涯学習の教材でもありますし、平和学習の物証、平和の語り部、こういう意味もあるわけです。そういうようなものを一つ一つ、こつこつ学びながら、やはり将来に残していくということを会としてやっていくということが大切です。そのためには私たち会員が、力を合わせて、お互いに勉強し合

日吉にある戦争遺跡

1）大学の「学び舎」が海軍中枢の軍事施設になった

第一校舎・寄宿舎（浴場共）・柔剣道弓術空手及卓球道場・赤屋根食堂・体育専用室・学生文化団体（専用室）・教会堂など5万坪のキャンパス（海軍省と貸借契約部分）。

2）海軍は5000 m の地下壕を築造

①A　連合艦隊司令部（海軍総隊司令部）地下壕

①B　軍令部第三部（情報部）・東京通信隊・航空本部地下壕

②　軍令部第三部（情報部）待避壕

③　人事局・経理局地下壕

④　艦政本部地下壕

3）海軍は農家から土地の強制収用・屋敷の強制移動

4）500名の予科塾生が陸上競技場から「学徒出陣」（慶應義塾全体で3000名～3300名）

アジア太平洋戦争敗戦までに戦没した塾生や卒業生・教職員は2225名

5）日吉のまちは空襲にさらされる

日吉台国民学校…学区のお寺に学童疎開・人事局功績調査部の接収・そして空襲

日吉地区を襲った主な空襲…1945年4月4日、4月15日～16日、5月24日

宮前地区　31軒中25軒焼失。

箕輪地区約50軒中25軒焼失。大門地区20軒中18軒焼失。

慶應義塾大学工学部建物の80％焼失。

って、着実な活動をしていきたいと、こういう風に思っている次第です。

保存の会の組織

さて、そういう意味で、私たちの会が、今どのぐらいの組織をもって、具体的にどんな活動をしているのかということを次にお話ししたいと思います。二〇一〇年五月現在会員は三四〇名おります。ほかに団体の加盟が九団体ほどあります。総会は年に一回、大体五月か六月くらいにやっております。

会を運営していくために運営委員会という組織を作っていまして、メンバーは大体二〇名から二一名位で、毎月会合を開いています。去年は一〇回、今年も一〇回、夏休みとか冬休みがあるので、年間一〇回くらいになるんですが、そういうようなところで、みんなで意識、考え方を共有しながら、会の活動を行っていくということです。それも、あまり厳しい、がんじがらめになるようじゃやっぱり大変ですから、これは和やかに、しかしながら筋だけは通して進めていこうじゃないかというような考え方で進めています。

会はいろいろな活動をしているのですが、年に数回発行する会報の発行は、たいへん重要な活動のひとつです。基本的には一年間に四回、去年は特集号を含め九二号から九六号まで六回も出しました。ついこないだ九七号を出しましたので、あと三回で一〇〇号に達します。これを記念号として発行したらどうか、なんてことを今相談しているところです。会報では、とにかくできるだけ、地下壕や会に関するいろいろな出来事を皆さんに公開しています。会員に共通した認識をもってもらって、運動を進めていく、これが大事だということです。

ちなみに、保存の会の今年の予算は一二〇万円で、非常に大きくなりました。こうした大きな予算を組めるようになったのは、会費はわずか一人一〇〇〇円、高校生以下は五〇〇円なんですが、見学会などで、資料をお買い求めいただくというようなことなどもやっているからです。

地下壕の見学会

さて、次に会の大切な活動である地下壕の見学会の実施と案内についての話に移りたいと思います。日吉台地下壕には、去年五月から今年の五月までの一年間で、二八〇〇人近い見学者が訪れております。そのうち小学校

から大学生の生徒さんたちが約一〇〇〇名にのぼっておりますが、この生徒さんたちの見学は、見学とはどういうものか、そしてその意味をお伝えするのにとてもいい事例になりますので、ここでは、この生徒さんたちの見学会のお話しをしたいと思います。

この一〇〇〇名の生徒さんたち、これを学校という教育の場による見学として捉えると、なぜ学校教育の現場が、地下壕の見学を求めてきているのだろうか、その狙いはなんだろうか、これをしっかり見極めることが、やはり案内する者にとっては大事なことです。見学の目的を私たちがきちっと把握したうえでご案内すること、これはなかなか簡単にできるものじゃないんですが、申込用紙に書いてもらったものをちょっと整理してみましょう。

去年の九月一七日、日吉台小学校の六年生と教員が来たんですが、人数は一二六名。日吉の街の歴史を探り、戦争について学習しようとする意欲を持たせるという目的で見学に来ています。目的は学校によってそれぞれみんな違うのですが、一〇月二九日、これは川崎の大師高校の一年生で一一名。ここでは、人権、環境、平和、福祉について考えるという単元の一環として、地下壕見学を通して平和を考える、地下壕保存に取り組んできた私たちとの交流を通して、今後の自分たちの役割を考える。どういうことかというと、受け身でなく、自分たちがこれからの平和に対して何ができるのか、何をしたらいいのかというようなことを考えるために、見学を希望したということですね。

それから一一月一九日の新羽小学校というところの見学をみてみますと、ここでは戦争遺跡の見学を通じて、戦争や平和について考える学習に取組むとしています。一一月二七日、中原中学校。これは川崎です。この学校では、戦争を教科書の中の出来事として学ぶだけで終わらせるのではなく、戦争の現場に行くことにより、世界大戦についての正しい歴史的事実を学ぶとしています。また、これからの世の中を創っていく一人として、自分自身がどう考え、行動をとっていくか考えるきっかけにしたいとなっています。

それぞれみんな違いますね。でも、こうした見学の目的に応えていくというようなことが、案内する側に必要になってくるというのが現実なんです。こうした目的に応えるために、私たちは、単に言葉として、これはこうですよ、というだけではなく、一緒に歩いて戦争遺跡に

触れながら語りかけるというようなことを心掛けています。

もう少しみてみましょう。一二月一七日の日吉南小学校。自分たちの住む街にある日吉台地下壕を見学することで、戦争の原因と拡大、その経緯を調べ、横浜での戦争の様子や人々の暮らしについて理解する。非常にすごいですね。また幅広く深く考えています。それぞれ学校によって違っているけれども、その根本的なところは、あの戦争はなんだったのか、そして平和ってなんだ、ということを知りたいという願いにあるということがわかります。

さて、日吉台地下壕の近くに下田小学校という学校があります。この例はちょっと古くて四年位前のものですけれども、山本先生という方が教育実践報告としてまとめたものをご紹介したいと思います。非常にまじめに地下壕を教育に生かそうと考えておられて、真剣に子どもと一緒に勉強するという気持ちが出ています。イラク戦争がありましたので、生徒も戦争というものに対してかなり高い意識を持ちながら対応しております。そのなかではじめのうちは六年生の担任として、山本先生は子どもたちと同じ立場で戦争の学習を進めようという気持ちをお持ちです。

ご本人は、港北区の社会科研究会で三回地下壕を見学していました。自信がないけれども先輩が取り組んできたことに依拠しながら内容を練ったようです。具体的な授業は、子どもたちにまず戦争について知っていることや思うことを子ども同士で話し合わせます。そのうえで、自分の住む街に地下壕があるんだというようなことを知らせ、見学したいという意欲を出させてから見学をするというふうに展開していきます。そうすると、見学をしたときに、地下壕の大きさにびっくりし、どうやって作ったんだろうか、なぜ作ったんだろうか、どのように使っていたのか、といった疑問がストレートに出てくるということです。そしてその次に、資料による調べ学習へと進んでいきます。そして最後に、自分の考えをまとめてみよう、というようなところにもっていく。このような教育の実践を通して、子どもたちが、戦争を過去の出来事としてだけでなく、今現在の問題として、身近にある問題として捉えさせるということに成功しているんですね。こうした教育実践は、短期間でできるものではない、相当時間をかけて考え、準備した結果だという風に思っております。私たちがこういう見学をご案内して、

ここまでやっていらっしゃる先生方の努力、こういうものに感謝しながら、共に学びながら活動をしていけるというのはたいへん嬉しいことです。

山本先生は、実践を終えて、子どもたちの学習の高まりを感じながら、学習を進めることができましたとおっしゃっています。子どもたちは、戦争の悲惨さを感じ、二度と起こしてはいけないと強く感じたようだということです。それだけでなく、現在に残る地域の戦争遺跡を学習して、その意義を考えることができたこと、日吉台地下壕を大切に保存し、子どもたちに伝えてくださった保存の会の方々の活動に触れることができたことも、非常にありがたいことだとおっしゃってくれています。

地域の先生方のこういう努力やお気持ちに触れますと、私たち自身を深めていかないという気持ちが高まってきます。そのために、私たち自身の学習会、ガイド講座というものを行って、より意義のある見学会、案内ができるように備えているわけです。

平和のための戦争展

さて、そのほかの活動として、私たちは年に一回、地域に根ざす「平和のための戦争展」というのを行っています。ごく最近、明治大学生田キャンパスのなかに、旧陸軍登戸研究所の資料館ができましたけれども、この戦争展は、その資料館を作った方々、大学の先生方、地域の方たち、それから私たち日吉台地下壕保存の会のメンバー、川崎の蟹ヶ谷地下壕保存の会、こうした人々が手を取り合って、毎年実施しているものです。去年でもう一七回目になります。この展示の基本となるテーマは、私たちの街のなかから戦争を見るということ。あの時の戦争では、戦場だけじゃなくて、いろんなところが空襲

を受けました。そしていろんなところから若者が戦場に出て行った。そういうようなことからして、その街々に戦争に関わる歴史がある、そこから戦争について学ぶということです。

去年の展示では、どうしたら戦争遺跡を地域の文化財として位置づけられるのかということを考えました。明治大学では、戦争遺跡を保存し、資料館を作った。私たち日吉の保存の会も、できたら、地下壕を保存するとともに、学習ができるミュージアムのようなものを作りたいと主張してきました。慶應義塾の塾長には、過去に二回ばかり提言をさせていただきました。そういうこともあって、「戦争遺跡をいかす平和ミュージアム」というシンポジウムを開催したわけです。ちなみに来年は、これまでの調査、研究を踏まえ、あの戦争末期の出来事、特に本土決戦体制についての研究もしていかなければならないといったような企画を組み立てていこうと思っております。

去年、この展示に来ていただいた方は、だいたい三〇〇人くらいでした。心に平和をもつために、集まった人みんなで歌おうというようなこともやりました。参加した専修大学付属の高校生は、「平和とは何か？ハト（鳩）からハートへ」ということで、自ら勉強したものを報告しました。

この展示は、こうした取り組みです。私たちは、地下壕を保存する、それを活用するということに留まらず、この戦争とはなんだったのか、平和とはなんだ、ということを幅広く深く考えることが大切だと思っているということです。

これからの活動を進めるにあたって（2010年度方針）

○日吉台地下壕見学会の内容を充実させる。
○充実した小・中・高校生のための見学会を開催していく。
○『ガイド養成講座』を充実させ、ガイドの輪を広げていく。
○日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。
○慶應義塾・横浜市・県・国への働きかけを、港北区住民の方を始めとする地域の方々と連帯して行う。
○全国の戦争遺跡保存運動の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
○運営委員会の活動の充実と拡大強化を図る。

保存の会のその他の活動

そうした場合、井の中の蛙になってはいけないので、全国の同じような活動をしている人たちと交流を深め、共に学びながら、今後の活動を考えていくことが大切になってきます。そうしたこともあって、一九九七年の七月のことですが、戦争遺跡保存の全国ネットワークというものが立ち上がり、第一回目の会合が開催されました。この活動は、来年で一五回目になります。私たちは、この全国ネットワークの活動も重視しており、来年の一五回目をなんとか慶應義塾の日吉キャンパスで行えないかということを考えているところです。こうした全国の輪の中で、中身のある取り組みをやっていきたいという風に思っているんです。

こうした全国的な戦争遺跡の保存を訴える方々の活動は、少しずつ実を結んでいました、おかげさまで、これはあとから十菱先生の方からも報告があると思いますが、今年の六月現在で、文化財として何らかの指定を受けた戦争遺跡が、一七一件という数に到達しております。これはもう大変な、画期的なことだと考えてよろしかろうと思います。全国の戦争遺跡の保存を目指す仲間たちと一緒に行動することによって、全国の動向も知ることもできますし、一緒に運動の高まりを期待する。文化庁が実施した戦争遺跡の詳細調査の報告書も、今年、年度内に出るということです。日吉台地下壕も、国史跡として保存すべき、Aランクの遺跡になっていますので、その報告を期待して待っている次第です。

私たちは、二〇〇二年から三年間、慶應義塾の表象デジタル研究センターの下で、共同研究をさせていただきました。そこで日吉台地下壕保存の会のテーマとして、「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」ということに取り組んでおりまして、それを一つの本にして報告しました。また、慶應義塾一五〇年の記念企画の中でも、講演会や展示に一緒に取り組んできたという実績もあります。

私たちの調査や研究の成果は、受付のところでも紹介していたと思うんですが、これまで幾つかの冊子にまとめてきました。そのなかには、横浜市港北区の補助をいただいて作った日吉台地下壕保存の会が二〇〇六年一月二八日に発刊した『戦争遺跡を歩く　日吉』もあります。これは小学校の六年生から中学二年生程度の生徒が読める戦時中の日吉を知る歴史の本です。日吉では、まだ、日吉の歴史の本を作ったことはなかったんです。これは

初めてのものです。この冊子については、小学校の校長会、それから中学の校長会に出かけて行って、副教材に使っていただく、あるいは見学にあたって使っていただきたいということを、直接お話ししてきました。そういうこともあって、見学に来る小学校の生徒さん、中学校の生徒さんには、無料で配布しております。大人からは一冊二〇〇円を頂戴しておりますが。いずれにしても、こうした冊子などによって、地域の子どもたちや、お母さん方、お父さん方にも、地下壕や戦争のことを理解していただくことが、ある程度できるようになってきているという風に言っていいでしょう。なお、これらの本は、研究の進展に応じて内容を改定していこうと思っています。こちらの本については、近々改訂して新しい本を作ろうという風になっております。こういう冊子の刊行というのも、私たちの大切な活動です。

おわりに

保存の会が行っている活動は、まだまだ色々あるんですが、時間も来ましたのでこのあたりで終わりにしたいと思います。最後に幾つか付け加えさせていただきますと、二〇一〇年度の活動の方針は、ミュージアム作りのための努力をしましょうということになっています。また、私たちは二〇〇五年に、神奈川新聞から神奈川県の地域社会事業賞というものをいただきました。これまでの努力の結果として受け止めております。これからも、さぼることなく、こつこつ、そして楽しく勉強しながら、活動を行っていきたいなと思っているしだいです。

雑駁なお話で大変恐縮です。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。